

韓国における大学教育の「卓越性」に対する認識

—「学部教育先導大学育成事業」の評価・成果指標を手がかりに—

全 京和

はじめに

多くの国々では、経済成長のために国際競争力を強化したり、イノベーションを創出することで環境やエネルギーなどの問題に対処したりしようと、優れた人材の確保に努めている。1970年代以降、その長期的努力の一環として関連する多くの取組が教育分野にも見られるようになった¹。このような背景のもと、大学教育の機能が再考され、大学は学生に従来どおり知識・技能を習得させるだけでなく、知識を統合して応用する能力、多様な他者と協働する能力やコミュニケーション能力、生涯学び続ける能力などを習得させ²、新たな価値を創造できる職業人、市民、人間を育成するという役割が期待されているのである。このような状況を反映し、大学教育の質的転換が進み、教育の内容や方法だけでなく、その評価や成果（アウトカム）の側面を意識するようになり、さらに大学教育における「卓越性」が追求されるようになった。

大韓民国（以下、韓国と略）では、産業化のために必要な専門人材を供給するという実用主義的な大学教育の機能が強調されてきた経緯がある³。その結果、大学は一種の高等職業訓練所のような役割しか果たしてこなかったという批判に見舞われ⁴、2000年代には、個人的な利害と人類の普遍的な観点をバランス良く兼ね備え、創意的に学習する知識人を育成することが、大学教育の社会に対する責務であると強調された⁵。さらに近年、モノのインターネット化が進む第4次産業革命に対応するためには、大学教育の本質的な変化が不可欠だとされ、教育のコンテンツ、教授法、カリキュラム等において伝統的な発想からの転換が必要だとされている⁶。このような状況を反映し、これまで特定の研究分野、または人材育成に偏って展開されてきた国の高等教育に対する支援事業も、教育課程や組織の支援・管理体制など、大学教育の全体的な改善を狙ったものへと拡大された。その代表的な取組として、2010年に開始された「学部教育先導大学育成事業（Advancement of College Education、以下 ACE 事業）」がある。この事業は、「良く教える大学」の育成を事業の目標に掲げ、先進型学部教育のモデルを作り出すことに力を入れてきた。

大学教育の中身が問い直されるにつれ、それに関する研究も増えてきた。近年の学術論文をみると大きく、(1) 教養教育、専門教育（原語は「専攻教育」、補習教育などのカリキュラムの編成・改善に関する研究⁷、(2) 学生や教員など大学構成員の大学教育に対する満足度に関する研究⁸、(3) 大学教育の学習成果や教育力の測定に関する研究⁹のように分類できる。また、ACE 事業に関する研究も増えており、主に事業構造の改善、成果指標の見直し、事業の成果分

析などのような政策提言を目指すものが多い¹⁰。多額の資金が投じられる事業でもあることから、その効果を測るために有効なツールの開発に向けた研究が政府の委託研究として、また各大学レベルでの学術研究として行われている。それに加えて、事業の選定大学の特徴や優秀事例校の成功要因に関する研究も見られる¹¹。このように大学教育を構成する次元や対象に関して、そして大学教育改革を目指す政府の事業に関して、一定の研究の蓄積が見られ、その範囲も拡大している。だが、多くの場合、大学教育が目指すべき方向性としての卓越性の概念については、その意味があたかも所与のものであるが如く扱われている傾向がある。その意味の理解をめぐって共有されていると思われる認識は、曖昧だからこそズレを生み出している可能性もある。また、大学教育をめぐる研究は多くの場合、特定の大学における事例を取り扱っているが、そこでも政府と大学の間で共有されているゴールとしての大学教育の方向性に対する認識は十分考察の対象になっているとは言えない。

以上のことをふまえて本研究は、諸外国と同じように大学教育の改善が求められている韓国において、大学教育の卓越性がどのように認識されているのかについて明らかにすることを目的とする。そのために、韓国で大学教育改革の一環として行われてきた「学部教育先導大学育成 (ACE) 事業」に注目し、特に、政府の見解が反映されている支援大学の選定のための評価指標と、選定大学によって設定された「核心成果指標」を手がかりにし、どのような側面が「良く教える」大学が提供する先進的な教育だと認識されているのかについて、卓越性の概念を用いて検討する。国が行う大型事業やそのために設定されている指標は、基準の設定や方向性の提示として社会一般に普及されやすいことから、優れた大学教育に対する認識を把握するために ACE 事業の取組を取り上げることは有効であると考えられる。

本論文の構成は次のとおりとなっている。まず、卓越性を理解するための始点として質の概念を取り上げ、その概念的特徴を整理する。次に、卓越性の概念について、質概念との関係性や、卓越性の定義、その判断基準などの検討をふまえて、本稿における卓越性の概念的な検討を行う。これらのことを通して、ACE 事業の「良く教える」大学というキャッチフレーズが意味するものを卓越性の概念を用いて考察するための土台を設ける。続けて、分析の対象である ACE 事業を分析する観点として、「投入-過程-産出モデル」と「卓越性を認識するための諸項目」を提示した上で、「選定評価指標」と「核心成果指標」を分析する。最後に、概念的検討と分析の結果をふまえながら韓国における大学教育の卓越性に対する認識について考察する。

なお、英語で「Excellence」という用語に対する訳語として、日本では「卓越性」、韓国では「수월성 (秀越性)」がそれぞれ使われているが、本稿では、主として「卓越性」を訳語として用い、必要に応じて「卓越性 (秀越性)」というふうに併記する。

1. 大学教育における「質」の概念

本節では、卓越性を理解する始点として、質の概念を取り上げ、概念の持つ様々な側面について整理する。

質の概念は、さまざまな文脈において、異なる定義を持って使われてきたものの、その使用頻度に比べて概念に対する理解が深く共有されてきたとは言い難い¹²。質の概念をめぐって研究の積み重ねがあるのも事実であるが、合意された一つの定義の提示には至っていないことか

ら、ここでは、質の概念の持つ諸側面に注目し、その概念的特徴を明らかにする。Harveyによる一連の研究は、質の概念が持つ性質と諸側面を高等教育の文脈から整理し、またその知見は1993年にGreenとの共著以来、継続的に再考され、多くの文献で引用されてきた。このような理由から、ここでは、Harveyの1993年と2006年の研究¹³に主として依拠しながら質の概念の持つ諸側面を検討していく。

Harveyは、概念としての質を、質の保証、測定、評価、点検などのモニタリングの諸形態のプロセスと分けて考える必要があるとし、「質」と「質保証」とを区分した上で、質の概念が持つ5つの側面を提示している。1つ目は、彼が「例外」または「卓越」と称している、総じて「絶対的・相対的な基準」としての質の側面である。これは質を特別な何かとして捉えるものであり、さらに(1) 例外的で特別な質、(2) 卓越性としての質、(3) 最低限の基準としての質という3つの側面に細分できる。(1) 「例外的なものとしての質」は、質の概念を捉える伝統的な見方の一つであるが、質を本来備わっている特有さに起因するそれ自体としての特別さとして考えるため、限られた少数のみ到達することができるという排他的な性質が含まれている。(2) 「高いスタンダードの超越、卓越性としての質」は、質を並外れた卓越性として捉える見方であり、実際、卓越性は質と互換性を持つかのようにも使われる。卓越性の参照基準に基づいてその有無が判断されるが、それは絶対的なものではなく、特定の状況における流動的な判断尺度であるため、すべてが到達できるものとなる。(3) 「要求された(最低限の)基準の充足としての質」は、卓越さがトーンダウンされた質の見方である。チェックリストを満たしていれば、質があると判断されるが、その一定の条件として最低限の基準が設定されている。

質概念の2つ目の側面は、彼が「完全」または「一貫性」と称している「確実性かつ一貫性の確保」としての質の側面である。これはプロセスに焦点が置かれた質の捉え方として理解することができるが、この見方は、「欠陥ゼロ」と「質の文化」という考え方によって支えられる。「欠陥ゼロ」とは、欠陥がないことを証明し、継続的にアウトカムが提供できることが質とみなすものである。この際、信頼性の確保とプロセスにおける管理は、滞りのない支援システムを整備し、質に対する責任を持たせるという「質の文化」を形成することで対処できる。3つ目は、要求された成果の達成という「目的適合性」としての質の側面である。この視点は、排他的な質の捉え方と区分される相対主義的な側面であるが、誰の目的であり、適合の度合いをどのように測るのかという議論をめぐって、その概念的な意味が異なってくる。4つ目は、「投資に見合う価値」としての質の側面である。これは、金銭的なコストに照らし合わせて、投入・過程・産出に対する質を判断するものであり、限られた資源を用いて最大限の利益を追求するという費用対効果が質を判断する根拠となる。最後の5つ目は、改善を目的とした組織的・制度的なプロセスにおける「変革」としての質の側面である。変革とは、組織の文化を改めることによって機関全体に影響をもたらす意図的な取組として理解できる。その変革によって教育的な諸活動の結果生み出される付加的価値は、機関の卓越性を測定する指標として見なされ、優れた大学は大きなインパクトを与えることができるとされる。

ここまで見てきた質の概念の持つ諸側面について、本稿で焦点をあてる卓越性という観点から整理すると、Harveyの議論では、卓越性は質と互換性を持つかのように用いられてきた傾向があり、最低限の基準を超えた高いスタンダードという参照基準に基づいて判断された質とし

ての性質を持っている。さらに、組織の行う諸活動に関わるプロセスの質的改善・変換を通して、組織は付加的な価値を創造することが目指されるが、その価値を生み出す程度の高さが卓越性として判断され得る。以上をまとめると、卓越性は、高い参照基準の超越として、また優れた組織が生み出す付加的な価値として、考えられていると言える。

2. 「卓越性」の概念的検討

本節では、高い参照基準の超越としての質である卓越性について理解を深めるために、先行研究における卓越性の概念をめぐる見解を提示し、本稿における概念的な位置づけを検討する。

優れていることや並外れた能力などを指すものとして使われてきた卓越性という用語は、歴史的に管理運営を支える認可制度に関する文脈で、教育機関によって提供されるサービスの質的レベルを明確にするために広く用いられてきた経緯があるが、近年、その内容、意味、価値、目的、手段などにおける変化が見られる。高等教育に対する質への要求は、卓越性の追求へとシフトしているのである¹⁴。

Gardner は、卓越性を、人の持つ多様な能力の啓発し、人類社会の進歩に貢献するという側面から定義し、それは社会のすべての領域において質を追求しようとする努力であるとした¹⁵。Van Tassel-Baska は、社会的に価値のあるものを追求しようとする理想的な基準への志向のための遂行過程の一切を卓越性であると定義した¹⁶。以上のことから、卓越性の概念は、個人の潜在能力を最大限に引き出すことから社会的に価値のあるものを追求することまでを含むものとして理解されていることが分かる。

高等教育の領域で卓越性があるというのは、優れていることや突出していることとして理解されるが、このことは、能力 (competence) を出発点とするプロセスの一部でもあることから、単純にアウトカムだけをもって定義することには限界がある¹⁷。また、優秀さの判断は相対的であることから、卓越性の概念は他者との比較とも関連し、ヒエラルキーにおける立ち位置を明確にさせ、競争体制を強化させる手段として使われる¹⁸。

Strike は、卓越性の判断基準について二つの側面を区別している¹⁹。一つ目は、「規範参照の概念 (Norm-referenced conception)」としての卓越性である。この側面に基づく、卓越性を目指して競争するが、それが達成できるのは一握りのみであり、この意味で卓越であるということは、他者と比べた時の程度をもって判断される。二つ目は、「基準参照の概念 (Criterion-referenced conception)」としての卓越性である。これは、ある行動に対して独立的に形成された基準に基づく卓越性の判断である。この場合、卓越性は所与の段階における達成の程度の問題であり、他者と比較して上下が決まるというものではない。これらをまとめると、卓越性を達成すべき絶対的な基準として設け、そのために競争するか、特定の状態における優秀さや達成の程度を判断基準とするかによって、概念に対する認識は異なるのである。

卓越性の概念を、研究の蓄積による理論的土台と文化的側面が考慮された社会的現象として考えることもできるが、同時に、実践への適用としての側面を意識することも必要とされる²⁰。韓国において、卓越性の原語である Excellence は「우수함 (優れていること)」「탁월함 (卓越さ)」と訳されるが、教育領域においては「수월성 (秀越性)」という造語で語られてきた。それは、従来から才能教育の文脈で議論されてきた「英才性」という意味合いを含んでいる概念

的理解を超えて、個々人の潜在能力を開花させることまでを含む今日的な意味が含まれているものとして理解することができる²¹。従って、韓国では学生一人ひとりの能力啓発に資する教育が「卓越性（秀越性）」教育として認識されてきた。また、韓国の『教育学用語辞典』²²によると、現代教育学における卓越性（秀越性）とは、「生活のすべての面において最上の標準に到達するための努力」であるとされる。このような見解に基づくと、大学教育における卓越性は、教授・学習に対する質的向上を志向することで、学生の学習の強化や良質な経験の提供などを目指す向上心までも、その概念の定義の範囲となり得るのである。

ここからは、前節でみた質の概念における卓越性と、本節での議論をふまえながら、本稿における卓越性の概念的位置づけについて考える。前節で論じたように、卓越性の概念は、高いスタンダードとしての参照基準を満たす優秀さとして歴史的にも質の概念の一側面として関連づけられてきた。だが、質の概念が、それ自体として最高のものという絶対的で属性本位の例外さとしての質から、一連の条件を満たせば一定の水準が認定されるというミニмумスタンダードとしての質までを幅広くその概念の範囲に含むのに対し、卓越性の概念は、最低限の基準より高いスタンダードを参照基準とし、それを超えることでその優秀さが証明されるという質の概念的範囲の一部を構成する限定的な意味合いしか持たない。従って、本稿では、これまで見てきた議論をふまえて、卓越性を、価値の多元性への意識や個々人の自我の実現という基礎の上で、ミニмумスタンダードを超えてさらに優秀な方向への転換を目指すこととして、また、そのような状態に対する程度の判断として捉える。

その上で、以下の分析では、卓越性の判断・評価について合わせて検討する必要があるため、質に関する Harvey²³と Barnett²⁴の研究を援用し、卓越性の判断・評価に対する諸側面を次のように提示する。Harvey の議論に従えば、卓越性は、限られた少数のための絶対的な質と異なりすべてに開かれたものであり、ミニмумスタンダードとしての質よりさらに高い基準である。その際、卓越性を評価・判断する視点としては、「確実性かつ一貫性」、「目的適合性」、「費用対効果」、「変革」の側面から理解することができる。この諸側面を Barnett が提示した質の評価に対するアプローチと合わせて整理し直すと、卓越性の評価には、(1) 投入と産出要素のような量的指標が判断の根拠となる「客観主義的な評価」、(2) 各自の機能が考慮された目的適合性が確実かつ継続的に確保され、内部構成員の間でその意識が共有されているかという「相対主義的な評価」、(3) 教育の諸活動に関わるプロセスの質的改善と組織構成員の能力向上に対する「発展主義的な評価」というふう捉えることができる。

3. 韓国における大学教育の改善

本節では、前節における卓越性の概念的検討を念頭に置きながら、韓国における大学教育の改善に向けた政策的取組として「学部教育先導大学育成事業（以下、ACE 事業）」を取り上げる。国が行う大型事業やそのために設定されている指標は、基準の設定や方向性の提示として社会一般に普及されやすいことから、優れた大学教育に対する認識を把握するために、韓国的高等教育領域における代表的な財政支援事業の一つである ACE 事業を分析の対象とする。

(1) 「学部教育先導大学育成（ACE）事業」の概観

ACE 事業は、学士課程における教育力の向上や、大学の自律性の向上、競争の促進を目的に、2008 年から「大学教育力量強化事業」として開始された。2010 年からこの事業は二分化され、2014 年からは「学部教育先導大学育成事業」に名称を変更し、個別に施行計画が立てられるようになった。さらに 2017 年には「大学自律力量強化支援事業 (ACE+)」として拡大改編された。このように名称変更や細かい調整などが行われてきたものの、政策目標である「良く教える大学の学部教育先導モデルの創出・拡散」という方向性は一貫している。本稿で取り上げる事例は、拡大改編される前の年である 2016 年度の ACE 事業に基づく。

ACE 事業全体のビジョンおよび目標は、(1) 教育課程および制度的組織の構造転換、(2) 教授・学習の質的向上、(3) 教育環境およびシステムの改善による教育力の再考を通して、学部教育の先導モデルを作り出し、拡散させることで、創意の人材養成につながる革新的な大学教育を実現することである。支援大学の選定は、大学の所在地（首都圏、地方）と、規模別（大規模、中小規模）の特性を考慮し、書類評価（第 1 段階）、現場評価（第 2 段階）、最終審議（第 3 段階）を経て行われる。2016 年には、2014 年と 2015 年からの継続支援校を含む計 32 校に対して支援が行われた。財政的支援規模は、支援期間の 4 年間、1 校あたり平均 20 億ウォン（約 1 億 9 千万円）で、成果が不十分だと評価された下位 10%の大学に対する支援の中断も可能になった。取組の成果は、年次評価、中間評価、総合評価によって測られ、評価の基準として、各大学によってそれぞれ設定された全体的な取組を包括する「核心成果指標」と、個別の取組に対する「自律成果指標」が用いられる。

(2) 分析の観点

大学教育の「成果 (performance)」は、大学システムの構成要素が「投入-過程-産出」の段階を経て循環した結果として表出される。この場合の成果は、政策やプログラムの単なる産出という意味を超えて、その結果が趣旨や目標にどれほど符合するのかに対する評価、つまり達成の程度を指すと言える²⁵。

ACE 事業における支援大学の「選定評価指標」は、優れた大学教育を行うために最低限必要とされる基準をクリアしているかどうかを判断するものであり、一方、選定大学の「核心成果指標」は、大学が提供する教育活動を含む改善に向けた取組を評価するためのものである。これらには、選定条件や成果評価などに関するそれぞれの価値判断を含む準拠棒としての見解や認識が反映されている。このような前提にもとづき、ACE 事業の評価・成果指標を分析する一つの観点（観点 1）として上述の「投入-過程-産出モデル²⁶」を用いる。投入 (input) とは、例えば、教育に関わるリソースや、学生・教職員のレベルなど、背景的な要素が含まれるが、どの要素も教育の管理・運営に対する直接的な決定要因ではない。過程 (process) とは、管理運営・支援体制までを含む教授・学習活動の特徴づける諸要素である。産出 (output) は、教育の実施過程による結果、例えば、教育的進捗や組織構成員の成長などのような側面にまでに及ぶ効果を指す。

ACE 事業の政策目標は「良く教える大学の学部教育先導モデルの創出・拡散」である。ここには大学教育を先導するという卓越性の追求が方針として現れている。そこで、分析の二つ目の観点（観点 2）として「卓越性を認識するための諸項目²⁷」を提示し、それを本稿で対象と

全：韓国における大学教育の「卓越性」に対する認識

する学部教育段階に合わせて修正、選定大学によって設定された「核心成果指標」とその下位項目に照らし合わせながら分類する。「卓越性を認識するための諸項目」は、ある機関、部門、プログラムなどに対する卓越性の判断に用いることのできる参照枠である。これらの基準には卓越な教育機関の特徴が反映されているものの、すべての項目を満たすことが求められるわけではない。「卓越性を認識するための諸項目」としては、(1) 進展的・戦略的なガバナンスとマネジメント、(2) 学習の高い成果、(3) 修了・卒業時における学生の目立つ実績、(4) 学生の格別な学習経験、(5) 学生の高い満足度、(6) 社会・経済・文化的発展の支援、(7) 国際化へのコミットメント、(8) 教育の社会的効果に対する意識と市民の参加促進、(9) 研究や学術的発達へのコミットメント、(10) 公平性と学問の自由の推進が挙げられる。この中から、ACE 事業が対象とする大学教育の文脈を考慮し、(1)から(7)までを成果指標の分類に用いることにする。

(3) 分析の結果

分析に用いた資料は、2016 年度の『学部教育先導大学育成事業（ACE）基本計画²⁸⁾』の選定評価指標（観点 1）と、同年度の支援大学 32 校によって提出された『事業計画書（最終版）²⁹⁾』の「核心成果指標」（その下位項目を含む）（観点 1 と 2）である。

表 1. 「投入-過程-産出」に基づいた選定評価指標の分類

段階	評価領域	評価項目
投入 (6)	教育環境	: 専任教員確保率, 全体の在学生のうち学部生の比率, 教育費の還元率
	発展能力	: —
	発展計画	: 目標の具体性・妥当性, 計画の整合性, 成果管理体系の妥当性
過程 (15)	教育環境	: 学士管理および教育課程の運営
	発展能力	: 教育課程の構成および運営状況(教養教育課程, 専攻教育課程, 非正規教育課程), 教育支援システムの構築状況(学生指導の充実と, 学習支援体制, 教育の質の管理体制)
	発展計画	: 教育課程の構成および運営計画(教養教育課程, 専攻教育課程, 非正規教育課程), 学士課程教育の構造・制度の見直し, 学事管理システムの改善, 学生指導の充実さへの取組, 学習支援体制の改善, 教育の質の管理体制の改善, 教育インフラの改善
産出 (4)	教育環境	: 就職率, 入学定員充足率
	発展能力	: 学士課程教育の構造・制度の見直し, 学士管理システムの改善実績
	発展計画	: 成果の拡散および継続可能性

出典：2016 年度『学部教育先導大学育成事業（ACE）基本計画』をもとに、筆者作成。

表 1 は、ACE 事業の支援大学を選定するための評価指標を「投入・過程・産出」に分類し、その該当数を提示したものである。その結果、政府によって設定されている評価項目は「過程」に対するものが多いことが分かった。中でも、応募時点における教育課程の運営状況と、それをどのように改善させていくのかという計画の側面が重要視されている。

表 2 は、ACE 事業に選定された大学によって設定された「核心成果指標」を「投入・過程・産出」に分類し、指標の設定件数を提示したものである。各大学は事業計画書に、ACE 事業の取組を通して達成を目指す成果指標を設定することになるが、その際、差別化された指標を 3 つほど提示すること、独創性や実現可能性を示すものであること、年次別達成目標値を記載す

ること、インプットだけでなくアウトカム指標を提示することのような一定の条件を満たせば各大学の自由裁量で設定することができる。表2から「核心成果指標」の設定には、「過程」と「産出」の側面が意識されていることが分かる。「産出」に分類された指標のうち、「核心力量指数」に関して言うと、その測定を内部で開発したツールを用いて行う大学もあるが、多くの場合、政府の依頼を受けて韓国職業能力開発院が2009年に開発したK-CESA（大学生核心力量診断評価）が利用されている。それは、大学生の核心力量（Essential skills/Core competencies）を測定することで、教育課程の開発と進路指導の指針や自己啓発ガイドを提供し、社会的変化や企業の要求に応じる人材育成を誘導することを目的とする³⁰。『ACE事業管理説明書』のなかで成果を管理する方法（案）として「奨励」されていることもあり、実際、ACE事業採択のプログラムに参加する学生には優先的に機会が与えられ、さらに診断にかかる費用も事業運営費から支援される。そのため、支援大学を中心に、近年その利用者数は増えている。K-CESAは、卒業時に大学4年間の学習成果をまとめて評価するタイプのテストではなく、必要に応じて適宜実施することを想定したテスト³¹であることから、特定の段階における成果を判断・評価する機能も有していると考えられることができる。今のところ、成果指標の設定に関して各大学に一定の自由裁量が与えられているが、2014年にACE事業の個別施行計画の策定が可能になった際、成果指標をめぐって各大学の取組を包括できる成果指標の明確化が要求されたこと³²や、その一案としてK-CESAを活用することが推奨され、各段階における一律的な判断基準の適用が外部のシステムによって可能になったことなどを考えると、その適用範囲が拡大されれば、成果指標の設定における大学の自由裁量の程度は低くなる可能性があると言えるだろう。

表2. 「投入-過程-産出」に基づいた「核心成果指標」の分類

段階	核心成果指標の例	設定件数
投入	教育科目開設, 学習活性化, 自己主導学習促進, 人材教育均衡度, 開発(共有)など.	10件
過程	需要に基づいた教育遂行, 自己主導生涯設計, 循環教育質管理, 教育サービス品質, 授業準備, 教育課程の充実度, 学士課程先導モデル進捗度, 教育プラットフォーム活性化, 教授・学生相互作用, 体験基盤教育成果, 共同体参与度など.	42件
産出	核心(必須)力量(K-CESAや独自開発ツールによる測定), 先導モデル拡散, 自己主導学業実績認証, 外部調査向上度, 基礎学力向上度, 人材成長指数, 教育満足度など.	41件

出典：2016年度、各支援大学の『事業計画書』をもとに、筆者作成。

表3は、各大学の「核心成果指標」の下位項目を卓越性の認識レベルに沿って分類し、各カテゴリーに含まれる件数を提示したものである。「核心成果指標」は3つ設定され、1つの「核心成果」あたり2つから5つ程度の下位項目が設けられている。分類の結果、大学教育の卓越性を追求するための取組は、「学習経験」、「学習成果」、「社会・経済・文化的発展の支援」、「学生の満足」の側面が強く意識された諸活動で構成されていることが確認できた。このことは、従来からの学問中心の大学教育の編成・運営を依然として含みながら、さらに社会とのつながりを意識し、特定の「力量」の育成が目指された教育の内容と学習の提供形式の見直しという転換として捉えることができる。具体的には、学生一人ひとりのニーズに対応し、彼らに意味のある学習経験を提供することで、大学が提供するサービスに対する満足度を高めるために力を入れていることや、学生の社会への進出を後押しするために地域社会や産業界との相互連携

全：韓国における大学教育の「卓越性」に対する認識

を進める方向で教育課程を運営していくこと、そして実用・経験中心の学習体験によって理論と実践が連携された参加体験型教育課程を運営していくことなどを通して、卓越性のある大学教育の実現が目指されていると言える。

表3. 「卓越性を認識するための諸項目」に基づいた「核心成果指標」の分類

認識レベル	核心成果指標の下位項目の例	設定件数
戦略的ガバナンス・マネジメント	大学の目標の達成に向けた執行部や管理運営組織による強いコミットメント, 体系的な統合管理および教育課程に対する点検.	10 件
学習の高い成果	学習能力と実践能力におけるキーコンピテンス, 資格や受賞, 学習の認証や記録, 外部の専門的機関による認証.	44 件
修了・卒業時における学生の目立つ実績	学生らの就業レディネス, 就職率, 進学率などの実績, 労働市場における活躍や専門職における成功など.	8 件
学生の格別な学習経験	豊富な学習資源, 質の高い教授・学習, 学生支援, 革新性のある学習経験と教育のプロセスの強化, 学習経験をより良くするための教授方法・形態に対する変革.	54 件
学生の高い満足度	最も重要な利害関係者としての学生に対するサービスの提供や彼らの学習経験に対する満足度を学内外のツールで調査.	31 件
社会・経済・文化的発展の支援	地域コミュニティからの要請に対する対応, 奉仕活動, 関連機関との連携, 学外への成果の共有と拡散.	34 件
国際化へのコミットメント	世界レベルを意識した取組, 海外大学との(人的)交流, .	8 件

出典：2016 年度、各支援大学の『事業計画書』をもとに、筆者作成。

本節では、優れた大学教育に対する認識を明確にするために、政府の支援大学選定のための評価指標、選定大学の「核心成果指標」とその下位項目を手がかりに見てきた。そこで、大学教育の「過程」に対する指標が最も多く設定され、その次に「産出」の順であることが明らかになった。このことから、卓越性を判断する指標として、大学の組織的・制度的なプロセスにおける質的転換の側面が意識されていることが言える。そして、ACE 事業の支援大学は、卓越性を追求する大学教育の取組として、学生から社会までのニーズに応え、いわゆる 21 世紀型能力の育成を含む学生の全人的な成長につながる教育の内容と提供形式の改善を行っていた。そこで、どのような側面を成果として捉え、有効性を判断する根拠とするかについては、各大学に一定の自由裁量が与えられていた。しかし、近年、包括的に成果を判断する指標の明確化への要求や、政府主導で開発された外部のシステムの活用による成果の把握と測定のように、成果に対する一律的な判断基準の適用が試みられている。このことをもって考えると、今後、外部のシステムが判断基準として用いられる範囲が拡大されれば、成果の捉え方をめぐって大学の声が反映される余地が少なくなる可能性があると言える。

4. 考察

本稿は、韓国ではどのような側面が「良く教える」大学の提供する先進的な教育だと認識されているのかについて、ACE 事業の評価・成果指標を手がかりに、卓越性の概念を用いて検討することを目指している。そのために、まず第 1 節では、卓越性を理解する始点として質の概念を取り上げ、概念の持つ様々な側面について整理した。その結果、高い参照基準の超越とし

て、優れた組織が生み出す付加的価値として捉えることができる卓越性の特徴が明確になった。

続く第2節では、卓越性の概念に含まれる諸次元と判断基準の側面について論じ、本稿における卓越性の概念的位置づけを検討した。そこで、卓越性は、価値の多元性を意識した高い水準の志向、またその程度に対する判断として捉えることができることを提示した。さらに、卓越性の判断・評価について、絶対主義的評価（卓越性の量的な測定）、相対主義的評価（目的適合性の達成程度）、発展主義的評価（プロセス重視の形式的な評価）の区分を提示した。

こうした概念整理をふまえて、第3節では、ACE事業を分析する観点として、「投入-過程-産出モデル」と「卓越性を認識するための諸項目」の二つを提示した上で、支援大学を選定するための評価指標と支援大学によって設定された「核心成果指標」を分析した。その結果、指標の設定は「過程」、「産出」の順で多いことが分かった。また、支援大学は、卓越性を追求するための取組として、社会にまで拡大された大学教育に対するニーズを意識し、学生の全人的な成長につながる学習機会の提供と教育の内容、提供形式の改善を行っていることも明らかになった。そこで、成果の捉え方や有効性の判断をめぐって各大学に一定の自由裁量が与えられてきたが、成果判断指標の明確化への要求や、成果の測定における一律的な判断基準の適用が試みられていることから、成果をめぐる解釈と判断において大学の立ち入る余地が少なくなる可能性があることをも提示した。

以上のことをふまえて、第2節まで行った卓越性の概念的検討を、第3節の分析結果に照らし合わせて考察する。その結果、韓国では大学教育のどのような側面が卓越性を追求するために重視されているのか、換言すると、ACE事業で言う「良く教える先導的な学部教育」とは何かについて、次のようなことが言える。すなわち、「良く教える」大学では、社会的にその重要性が認識されている新しい能力（核心力量）の育成を前提にしながら学生一人ひとりの潜在能力を最大限に引き出すための多様な学習経験（教育活動）を提供することで、付加的な価値（大学教育によるプラスアルファ）を生み出すことができる。その「教える」という言葉には、学習者中心の学びとそれによって育成が目指される能力が優先事項として置かれるが、依然として大学の役割は教えることであるという意識が反映されている。だが、その中に含まれる対象範囲は、従来のような学問本位の教授・学習から一步進んで、学生の視点に立ち、社会とのつながりを意識し、大学を超えたフィールドを教育の場とすることが教育力として捉えられるというふうに拡大されたものである。その際、先導的かどうか（卓越性）の判断は、客観的というより、価値の多元性を容認する特定の状況における流動的な基準によってなされる。さらに、最終的に先導モデルを作り上げ、拡散することまでが目指されているという意味で、その卓越性は、他の大学にも適用でき、到達できるものとして捉えられている。

大学教育における卓越性の追求という近年の流れにおいて、投入より産出の側面が意識され、さらに教育の過程における質的改善が重視されているが、これは、教育の成果が大学教育を通じた学生の質的变化・発達と関連があると見なされているためである³³。つまり、学生をエンパワーメントさせることで、自ら正の変化を生じさせ、さらにそれは、大学レベルにおける変化と相まって相乗効果が期待できると考えられているのである。従って、教育活動の卓越性を評価するための指標として、就職率や成績向上度などのような産出に特化した指標だけでなく、講義の評価や学生の満足度、授業への参加などの指標も使われている。このように大学教育の

全：韓国における大学教育の「卓越性」に対する認識

過程を成果指標として捉える傾向は、本稿で対象とした ACE 事業の「核心成果指標」においても見られた。ACE 事業の場合、現時点では、卓越性の評価が各大学によって設定された指標にもとづいて行われ、大学内部構成員や利害関係者によって明確化された要求に対する取組の進捗状況（目的適合性）と、その所与の段階における達成の程度によって判断されている（相対主義的・発展主義的な評価）。だが、その一方で、K-CESA のように判断基準が外部に委ねられた評価の形態が推奨されていることも事実であり、その場合、産出としての成果は、ヒエラルキーにおける競争の結果として比較が可能になるという意味で、客観主義的な評価がさらに強く意識される可能性があると言える。このことは、卓越性の基準をさらに向上させることよりも、卓越性をさらに素早く達成するための効果的な改善の方法をめぐるベンチマークに資する可能性をも持っている。

これまで見てきたように、韓国の大学教育は、卓越性を追求する先導的な学部教育のモデルを造り出し、その拡散を通して大学教育全体へ広めることが目指されている。このような大学の卓越性の追求は、学部教育の文脈を含んでいる他の諸事業にも見られる。本稿で対象とした ACE 事業の他にも、「大学特性化 (CK I & II) 事業」、「産学連携教育活性化先導大学 (PRIME) 事業」などが挙げられる。これらについては、本稿で取り扱う範囲を超えるため、さらに詳細な議論を必要とするが、大まかな傾向として次のようなことは指摘できる。それは、従来からの認証評価からさらに高いレベルを目指した大学教育の変革が内部の組織的・制度的見直しとともに進められている。このような卓越性の追求が全体的に進み、それがベンチマークを通して他の大学にまで拡大されれば、それは結局、ミニマムスタンダードの上方修正の議論へとつながる可能性として考えられる。

おわりに

本稿では、韓国における大学教育改革の取組として「学部教育先導大学育成事業」に注目し、そこで設定されている「選定大学評価指標」と「核心成果指標」を手がかりに、韓国における大学教育の卓越性に対する認識について考察した。そこで明らかになったことは次の二点である。一つ目は、韓国における「良く教える大学」とは、大学教育が対象としてきた範囲を広げながら新たなニーズに応えるために、学習経験の提供形態の多様化や内容の見直しなどを含む教育課程の充実を図り、付加的な価値を造り出すために継続的に取り組んでいく大学として捉えることができることである。二つ目は、韓国において大学教育の卓越性は、目的適合性の程度によって判断される相対主義的・発展主義的な評価が重視されるが、その一方で、外部のシステムの活用による一律的な判断基準の適用が同時に進められているという意味で、客観主義的な評価が拡大する余地があるということである。

本研究は、所与の前提として曖昧なまま用いられてきた大学教育の卓越性について、概念的特徴の明確化からはじめ、韓国の事例を取り上げながら優れた大学教育を評価する指標を手がかりに卓越性に対する認識を明らかにしようとしたという点で意義があると考えられる。だが、現時点における暫定的な結論をさらに検証していくためには、指標の設定をめぐる各大学の自由度がより担保されている「自律成果指標」にまで分析の対象範囲を広げること等のような課題に取り組んでいくことが必要となる。加えて、「大学特性化事業」や「産学連携教育活性化先

導大学事業」のような卓越性の文脈で捉えることができる他の事業において設定されている成果指標との比較・考察を通して、大学教育における卓越性の認識をより深く提示していくことも重要である。これらを今後の課題としたい。

注 (※は、ハングル文献)

- 1 ※PARK Young-sook 『韓国の秀越性教育の分析』全北大学校大学院教育学科博士学位論文,2010年,1頁.
- 2 深堀聡子「大学教育の質保証: グローバル化による学力観と質概念の変化のなかで」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』第65巻、2013年、375頁.
- 3 ※LEE Sang-ju 「特集: 今日における我が大学-反省と改革(1) 大学の本来の姿の探索と質的水準の問題」『現象と認識』第17巻第1号、1993年、18頁.
- 4 同上書、12~13頁.
- 5 ※JUNG Young-Kun 「21世紀と大学教育の理念」『人文科学研究』第14号、2004年、9頁.
- 6 ※LEE Hyun-cheong 「大学の危機と未来における大学の役割」『韓国大学新聞』2017年1月1日付記事 (<http://unn.net>, 2017年8月30日最終閲覧).
- 7 近年の研究として、HONG Seung-yeon 「大学新入生の適応支援のための教育要求の分析」『教育総合研究』第14巻第1号、2016年、271~295頁など.
- 8 近年の研究として、※KIM Eun-joon 他「大学生の大学に対する満足度を決定する大学教育サービス品質の分析」『経営教育研究』第32巻第1号、2017年、1~24頁など.
- 9 近年の研究として、※BAE Cheon-ung 他「大卒就職者が認識する大学教育の学習成果の分析研究: 力量の認識と大学教育の寄与度を中心に」『教育発展論叢』第38巻第1号、2017年、265~294頁など.
- 10 代表的な研究として、※PARK Hyun-ju 他「教育力量強化支援事業5か年度主要定量指標の変化に対する実証的分析」『韓国教育学会』第51巻第4号、2013年、249~281頁、 ※KIM Jung-su 他「学部教育先進化事業の成果指標に対するメタ評価研究」『韓国教育』第38巻第1号、2011年、135~161頁など.
- 11 ※BYUN Ki-yong 「学部教育優秀大学の特徴と成功要因」『教育問題研究』第62巻、2017年、227~259頁.
- 12 Mishra S. *Quality assurance in higher education: An introduction*. National Assessment and Accreditation Council, India, 2007, p.15.
- 13 Harvey, L. & Green, D. "Defining quality". *Assessment & evaluation in higher education*, 18(1), 1993, pp.9-34.; Harvey, L. "Understanding quality". *EUA Bologna Handbook*, 1(1), 2006, pp.1-29.
- 14 Rostan, M. & Vaira, M. *Questioning excellence in higher education: An introduction*. Rotterdam: Sense Publishers. 2011, p.5.
- 15 Gardner, J. *Can we be equal and excellence too?*. New York: Harper Colophon Book.
- 16 Van Tassel-Baska, J. "Excellence as A standard for all education". *Roepers Review*. 20(1), 1997, pp.9~12.
- 17 Brusoni, M. et al.、前掲論文、21頁.
- 18 同上論文、24頁.
- 19 Strike, K. "Is there a conflict between equity and excellence?". *Educational Evaluation and Policy Analysis*. 7(4), 1985, pp.409-411.
- 20 Brusoni, M. et al. *The concept of excellence in higher education*. ENQA occasional paper. Brussels., 2014, p.9.
- 21 PARK Young-sook、前掲論文、12~16頁.
- 22 ソウル大学校教育研究所編『教育用語辞典』ソウル: ハウドンソル、1999年.
- 23 Harvey, L.、前掲論文、1~29頁.
- 24 Barnett, R. *Improving Higher Education—Total Quality Care*. Bristol: SRHE and Open University Press. 1992.
- 25 ※SHIN Hyun-seok 他「学部教育の質と成果の意味に対する省察と焦点」『教育行政学拳銃』第34巻第1号、2016年、78頁.
- 26 Astin, A. *Four Critical Years. Effects of College on Beliefs, Attitudes, and Knowledge*. 1977; *What matters in college. Four critical years revisited*. 1993.; Biggs, J. "From theory to practice: A cognitive systems approach". *Higher education research and development*. 1993;12(1):73-85.
- 27 Brusoni M, et al.、前掲論文、31~32頁.
- 28 教育部 (大学財政課) 『学部教育先導大学育成(ACE)事業基本計画』、2016年.
- 29 『大学自律力量強化支援事業 (ACE+)』のウェブサイトにて入手可. (<http://eduup.kcue.or.kr/support/supportUniv.do?projectSeq=201705010000001>、2017年11月18日、最終閲覧).
- 30 『大学生核心力量診断評価』ウェブサイト(<https://www.kcesa.re.kr/intro.do>, 2017年11月18日、最終閲覧).
- 31 石川裕之「韓国における高等教育の質保証システムと学習成果アセスメントのインパクト」深堀聡子 他『学習成果アセスメントのインパクトに関する総合的研究』国立教育政策研究所、2012年、142頁.
- 32 教育部 (大学財政支援課) 『2014年度学部教育先導大学育成 (ACE) 事業施行計画』2014年.
- 33 ※SHIN Hyun-seok 他、前掲論文、77頁.

(比較教育政策学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2017年8月31日、改稿2017年11月20日、受理2017年12月20日)

韓国における大学教育の「卓越性」に対する認識

—「学部教育先導大学育成事業」の評価・成果指標を手がかりに—

全 京和

本研究は、韓国における「学部教育先導大学育成事業」の評価・成果指標を手がかりに、先進的な大学教育に対する認識について、卓越性の概念を用いて検討することを目的とする。まず、卓越性を理解する始点として質の概念の諸側面について整理した。次に、卓越性の概念について、その諸次元と性質を議論し、本稿における卓越性の概念的検討を行った。最後に、ACE 事業を分析する観点を提示した上で、「選定評価指標」と「核心成果指標」を分析した。結果、(1) 大学教育の卓越性は、新たなニーズに応えるために対象範囲を拡大させ、教育課程の見直しと充実を図り、付加的な価値を造り出すために継続的に取り組んでいくこととして認識されていること、(2) 卓越性の判断には、目的適合性の程度という相対主義的・発展主義的な側面が重視されるが、一方で、外部における判断基準の設定が進められており、客観主義的な側面が拡大する余地があることなどの知見が得られた。

Perception of Excellence of Undergraduate Education in Korea: Focusing on Evaluation and Performance Indicators of the Advancement of College Education Project

JEON Kyoung-hwa

This study was performed to examine the perception of advanced undergraduate education by focusing on evaluation and performance indicators of the Advancement of College Education Project according to the concepts of quality and excellence. First, as a starting point for understanding the concept of excellence, the concept of quality, and its meanings based on different approaches were summarized. Second, the concept of excellence was discussed focusing on its dimensions and the nature, and then the conceptual framework for this paper was established. Third, an overview of the Advancement of College Education project was presented, and two perspectives for analysis were shown. Then, the project's evaluation and performance indicators were analyzed. The results indicated (1) that excellence of undergraduate education is a goal that should be continuously worked toward to produce additional value and expand its scope, and education curricula should be reviewed and enhanced to meet the emerging needs, and (2) relativistic/developmental aspects of evaluation, such as degrees of fitness for purpose, are important to determine the excellence of undergraduate education. On the other hand, there is a possibility that objectivistic aspects of evaluation, such as setting external evaluation criteria, will be promoted.

キーワード：大学教育、卓越性、成果指標

Keywords: Undergraduate education, Excellence, Performance indicators